

令和7年度 学校評価シート

学校名：専修学校クラーク高等学院天王寺校

目指す学校像	生徒一人ひとりの可能性を見つけ、才能を開花させる学校
育てたい生徒像	1. 特化型コースで「好き」や「得意」を追求する生徒 2. 自ら考え、自ら学ぶ力を身につけ、何事にも主体的に行動できる生徒 3. 夢を見つけ、それに挑戦し、達成を目指す生徒

本年度の重点目標	1 特色重視の特化型教育で生徒一人ひとりの才能を開花させる
	2 企業・地域連携授業による非認知能力の向上
	3 希望進路の決定と大学進学率の向上

※ 重点目標は3～4つ程度設定し、それらに対応した評価項目（年度達成目標）を設定する。

※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。

※ 評価項目に対応した具体的方策と方策の評価指標を設定する。

※ 学校関係者評価は、自己評価の結果を踏まえて評価を受ける。

達成度	A	十分に達成した（80%以上）
	B	概ね達成した（60%以上）
	C	あまり十分でない（40%以上）
	D	不十分である（40%未満）

自己評価							
年度目標				年度評価（令和8年2月26日現在）			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善方策
1	現状>探究学習やICTを活用した特色ある授業を展開しているが、学習成果が教科・コースごとに分散し、生徒自身が自分の強みとして整理・発信しきれていない点に改善の余地がある。	生徒が自分の強み・興味関心を明確に認識し、言語化できているか	・探究学習を軸とした自己分析ワークの定期実施 ・ICTを活用したデジタルポートフォリオの作成 ・個別面談による強みの言語化支援	・強みを文章で説明できる生徒の割合 ・リフレクションノートの定着率 ・自己理解に関するアンケートの肯定的回答率	・探究テーマを説明できる生徒は増加傾向にある ・デジタルポートフォリオ活用は学年差が見られる ・強みの言語化には個人差が依然としてある	B	探究学習やICT活用、英語教育など本校の特色ある取組は一定の成果を上げているが、生徒一人ひとりが自身の学力や強みの伸長をより実感できる学びへ発展させることが課題である。今後はEdTech教材を活用した個別最適な学びと協働的な学びを充実させるとともに、デジタルポートフォリオを活用して学習成果や資格取得、コース活動等を継続的に蓄積する。さらに、成果発表や個別面談を通して自身の成長や強みを言語化し、生徒が主体的に学習や進路を設計できる仕組みを構築する。また、英語学習への意欲向上と実用英語技能検定の取得支援を継続し、学習成果を実感できる機会を充実させる。
	課題>・探究、ICT、英語教育など各取組の成果が教科横断的に整理されていない ・生徒が自らの強みや成長を言語化し発信する機会が不足している ・個別最適な学びが自己選択型の学習設計に十分結び付いていない	学習成果が校内外で適切に可視化・共有されているか	・教科横断型の探究成果発表会の実施 ・外部関係者を招いた公开发表の機会創出 ・ICTを活用した成果物の共有や発信	・発表会への参加及び発表生徒数 ・外部参加者からの評価内容 ・成果物の校内外公開件数	・校内発表機会は安定的に確保できている ・QUEST CUP2部門で全国大会に出場 ・CLARK AWARDS2部門最優秀賞 ・HP、SNSを活用してタイムリーな発信ができている ・成果共有の体系化には改善の余地がある	A	
		専門的な授業の実施にあたり必要な人・モノの整備	・年初及び各学期ごとにコース長会議を実施 ・必要な機材や業務委託先を確保	・計画通りに実施でき、且つ、必要な機材や業務委託先を確保できたか	・各コースが必要とする機材の購入、必要な人材の確保は良好	A	
2	現状>企業・地域と連携した探究学習や学校行事を行っているが、非認知能力の成長を継続的・客観的に評価する仕組みが十分に整っていない。	地域・企業・大学等の外部関係機関との連携を強化	・企業や地域連携による実社会課題型プロジェクトの実施 ・生徒主体での課題設定及び計画立案の支援	・外部の方の講演会や連携したイベント等が開催できたか ・参加者の満足度	・課題設定に主体的に関わる生徒の増加 ・プロジェクト継続率は概ね良好	A	企業・地域と連携した実践的な探究活動は、生徒の主体性や協働性、課題解決能力の育成につながっている。一方で、生徒自身が探究活動の意義や自身の成長をより実感できるよう、実社会とのつながりを明確にした学習活動へ発展させることが課題である。今後は地域や大学、企業等との連携を一層強化し、実社会の課題に取り組むプロジェクト型の探究活動を充実させる。また、統一した評価基準やポートフォリオを活用して学びの過程や成長を可視化するとともに、成果発表や振り返り、相互評価の機会を充実させることで、主体性・協働性を継続的に育成し、その成果を進路活動にもつなげていく。
	課題>・連携授業が単発的な取組にとどまっている ・主体性、協働性などの評価基準が教員間で統一されていない ・振り返り活動が形式化し、深い内省につながっていない	協働学習を通して他者と協力する力が育成されているか	・チームで役割分担を行うプロジェクト学習の実施 ・協働スキルを評価項目に含めた授業設計 ・相互評価・他者評価の導入	・協働学習のポートフォリオが作成できている ・チーム内での役割遂行率 ・相互評価・他者評価での肯定的評価割合	・グループ活動での役割分担は定着している ・相互評価を活用する授業が増加 ・一部で協働が形骸化する場面がある	B	
		非認知能力の成長が可視化・蓄積されているか	・非認知能力評価用ルーブリックの統一 ・ICTを活用した評価データの蓄積 ・教員間での評価共有、検討の実施	・ルーブリック評価の経年変化 ・データ入力及び活用率 ・教員による評価活用事例数	・非認知能力の評価においてデータを活用してまでは進んでいない ・教員間で評価基準が共有されていない	C	
3	現状>探究学習や外部連携を通して進路意識は高まりつつあるが、進路選択や受験準備が個人差に左右されやすく、体系的な支援強化が求められている。	生徒が早期から主体的に進路を考えているか	・各コース独自の進路プログラム実施 ・大学や企業による進路講話の実施 ・進路に関する振り返り活動の定期化（進路希望調査：4月・7月・10月・2月）	・進路希望を明確にしている生徒割合 ・進路行事への参加率 ・進路意識アンケート結果調査：4月・7月・10月・2月）	・1年生からの進路行事を企画している ・進路希望の明確化は2年次後半に集中している ・情報収集には差がある	B	探究活動や外部連携を通して進路意識は高まりつつあり、早期から自身の将来について考える取組も定着しつつあるが、生徒一人ひとりの発達段階や進路希望に応じたきめ細かな支援をさらに充実させ、学習成果や探究活動、資格取得等を希望進路の実現へ着実につなげることが課題である。今後は1年次からの段階的な進路プログラムを体系化し、担任・学年主任・進路担当者が連携した個別面談や進路相談を充実させる。また、学習・進路データを活用した支援を進めるとともに、英語外部試験対策や大学連携講座を計画的に実施し、学力向上と大学進学を含む希望進路の実現を支援する体制を整備する。
	課題>・進路意識の形成時期に個人差がある ・ICTを活用した学習や進路データ分析が十分に機能していない ・英語力や探究成果を大学進学実績に十分に結び付けられていない	ICTを活用した個別最適な進路指導が行われているか	・学習及び進路データの一元管理 ・データを活用した個別面談の実施 ・生徒や保護者への情報共有強化 ・リフレクションノートを活用した進路指導の実施	・個別面談実施率 ・データ活用回数 ・保護者アンケート満足度	・コーチング面談は実施できているが、精度を上げていく必要がある。 ・データ管理体制は整備済み ・データ分析の活用度に課題がある	C	
		大学進学に必要な学力・英語力が向上しているか	・英語外部試験対策の計画的実施 ・大学連携講座や模擬授業の活用 ・個別学習計画に基づく学力支援	・英語外部試験スコア向上率 ・大学進学率（65%） ・進路決定率（100%）	・英語外部試験受験者・保有者の増加 ・総合型選抜入試において難関大学の合格者の誕生 ・上位層と中間層の伸びに差がある	B	

学校関係者評価
実施日（令和8年3月9日）
学校関係者からの意見・要望・評価等
総合進学コースにおいては数理探究アセスメントを実施し、生徒の探究力の把握と成長の可視化を図っている。7月から12月にかけての比較や、学年間での伸びから一定の成果が確認されている。一方で、生徒の満足度は向上しているものの「探究疲れ」が見られるケースや、教員側も探究が苦手な生徒への指導に苦慮している現状がある。入学時の学力や経験の差に対しては、外部の関係機関との連携を活用し、成功体験を積ませることで自信を醸成している。生徒の多様性が年々変化する中で、個々の成長を継続的に捉える視点が重要である。
従来の職業体験に代わり、企業から提示された課題に取り組み、最終的にプレゼンテーションを行う探究型学習へと転換している。これにより主体性や協働性、課題解決力といった非認知能力の育成が期待される。また、外部機関との連携を通じて、生徒が実社会と接点を持ち自己肯定感を高める機会にもなっている。今後は、2年次において企業課題に取り組む授業の体系化など、より計画的な導入が求められる。地域・企業との連携を一過性に終わらず、教育課程全体に位置付けていくことが課題である。
進路指導においては、海外大学へ進学した卒業生の活用や大学見学の実施などにより、早期から進路意識の醸成を図っている。総合型選抜を利用する生徒が7～8割を占めるため、2年生の冬には志望校を決定し準備を進める体制となっている。一方で、現状は担任の裁量に依存する部分が大きく、進路指導に関するデータの蓄積・共有が十分ではない点が課題である。また、個別面談も随時対応となっており、計画的な実施体制の構築が求められる。英検については高い意欲が見られ、進学実績向上の基盤となっている。